

中学一般入試(第一回)「国語」訂正

□ 本文の一字訂正。P4の上段 前から十行目。「ケージのトイレ」の「を」も「に」訂正する。

い智美の部屋は、もっと狭くなってしまった。ケージ②ト

イレも、

も ↑

二〇一八年度入学試験問題 (第一回)

国語 (五十分)

【注意】

- 一 この試験の問題文・設問は、1ページから14ページに印刷されています。
- 二 解答は、すべて別の「解答用紙」に記入しなさい。
- 三 文字は、正しくきちんと書きなさい。
- 四 、。 「」はそれぞれ一字と考えなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

智美(ちびちゃん)は、昨日から麻耶子(まやこ)が営む、年老いた犬の最期を看取るまで世話をする施設「ランケット」に住み込みで働くことになった。今朝、その「ランケット」の前に、一匹の*パピヨンが捨てられていた。飼い主を探し出した麻耶子は初仕事だと言つて、智美と、麻耶子の知り合いの灰原(はいばら)を連れて、飼い主の阿部(あべ)の元を訪れる。

麻耶子がなにかを言う前に、彼女が言った。

「仕方ないじゃない。わたしたちだって捨てたくなかったわ。でも、隣の人が管理会社に言いつけたから、管理会社からすぐに処分するように言われたのよ」

「引越すすればいいんじゃないですか？ 最近ではペット可の住居も増えましたよ」

「古いか、高いかどちらかじゃない。それに引越すをするようなお金なんかはないわ」

麻耶子のことばに、彼女は即答した。

A 智美の胸の中で暗い感情が渦を巻く。

もともとペット不可の住居でなど飼わなければよかつた

のだ。苦情を言った隣人が悪いようなことを言っているが、悪いのは自分だ。

阿部は早口で話し続けた。

「それにうちだけじゃないのよ。ペット禁止といつたつて、猫を飼っている家だつてあるのに、うちだけ注意されて不公平だわ」

麻耶子の声は静かだった。

「事情は分かりました。うちで引き取ることもできます」

「えっ」

阿部の目が大きくなった。

「助かるわ……ララはいい子なのよ。本当に」

ララというのがこのパピヨンの名前らしい。

「小型犬は一年預かりで四十万円ですが、今回は今後の追加料金なしで四十万で結構です。それでこちらで責任を持って新しい飼い主を探します」

麻耶子がそう言うと、彼女の血相が変わった。

「なに言ってるの。この子十五万円もしたのよ！ 血統書だつてあるんだから！」

「うちは繁殖には関わっていませんので、血統書は必要ありません。譲渡するときは避妊手術をしますから」

「それだけ価値のある子だって言ってるの」

麻耶子はひどく冷たい顔で笑った。

「なに言ってるんですか。子犬ならともかく、捨てられた成犬に価値なんかあるはずないでしょう。それは阿部さんだってわかってるでしょう」

智美は息を呑んだ。心臓を冷たい手でつかまれたようだった。

——ひどい……。

捨てられた成犬に価値なんかない。麻耶子がどんな人かはまだよく知らないが、少なくともそんな冷酷なことを言う人ではないと思っていた。

ララが智美の膝に前肢をかけた。あれほど警戒していたのに、智美の動揺に気づいたのか顔を覗き込んでいる。

麻耶子には犬たちがお金に見えているのだろうか。そんな人だとは思いたくなかったけれど。

さすがに阿部も驚いたようだった。

「ひどいこと言うのね……」

「すみません。こういう商売をしていると、きれいな事ではすまないんですよ」

智美はララを膝の上に抱き上げた。自分の家にいるせい

か、ララは逃げようとはしなかった。

「うちが引き取るなら四十万円です。これでもサーブス価格なんですよ」

阿部は吐き捨てるように言った。

「まるでヤクザね」

「あなたがご自分で飼い主を探すんでしたら、必要ないお金です」

「当たってみたいけど見つからなかったのよ。老犬ホームなんてやってるから、犬好きでいい人だと思ったのに」

勝手な言いぐさだ。怒りのあまり吐き気までしてくる。「もういいわ。置いていって。可哀想だけど、この子、保健所に行くことになりそうね。あなたたちのせいで」

阿部は捨て台詞のようにそう言った。

たまらず口を開きかけた灰原を、麻耶子は制した。「新しい飼い主を探された方がいいと思いますよ。ご自分

のためにも」

麻耶子のことばを無視して、阿部は顔を背けた。

麻耶子はためいきをひとつついて、立ち上がった。

「さ、帰るわよ。灰原くん、チビちゃん」

だが、智美は動けなかった。ララは膝の上で、大人しく

抱かれている。ぬくみと小さな心臓の鼓動。ララがぺろりと智美の手を舐めた。

自然に口が動いていた。

「この子、私が引き取っちゃ駄目ですか？」

「え？ 智美ちゃん！」

灰原が驚いたような顔になる。阿部は一瞬で笑顔になった。

「どうぞどうぞ、そうしてあげてよ。この子、本当にいい子なのよ。お座りだって、待てだってできるし、トイレだってあんまり失敗しないのよ」

阿部に聞いたつもりはない。智美は、麻耶子に聞いたのだ。

麻耶子は冷静な顔で、座ったままの智美を見下ろしていた。智美は言い募った。

「ご迷惑はかけません。散歩も仕事の前か終わってから行くし、えさ代も自分で出します。ペットを飼っちゃいけないわけじゃないですよ。麻耶子さんだってジュリアンを飼ってるし」

自分の理屈が強引だということはわかっていた。通常なら住み込み仕事で、犬を飼うなんて許してもらえないはずが

ない。

だが、このパピヨン置いて帰ったら、自分はもうブラケットで働けない気がした。それだけではない。きっと、どの犬を見てもこの子を思い出して、悲しい気持ちになってしまう。

ララは智美の腕の中でじっとしている。湿ったような柔らかい毛が心地よかった。

麻耶子はふっと息を吐いた。

「仕方ないわね。その代わりあなたがちゃんと、その子に責任を持つよ」

「もちろんです」

智美は力強く頷いた。

H 阿部のあからさまにはっとした笑顔が目に入って、智美は自分に誓った。

絶対に、この飼い主のようにはならない。

目覚まし時計が鳴る寸前に目を覚ました。

こんなにくっすり眠ったのはひさしぶりだった。こんなに爽やかに目覚めたのも。

ずっと仕事が決まらないことや、面接で落とされるスト

レスに心を苛こまれていた。ブランケットで働くことが決まった後は、新しい職場に対する不安でいっぱいだった。

それらが全部片付いた上、昨日はあまりにもいろんなことがありすぎた。

お風呂に入ったあとは、髪かみの毛かを乾かわかすのもそこそこに、ベッドに倒たおれこんでしまったような気がする。

そして、ベッドの中、智美のお腹のあたりにあたたかいものがあった。

ララのトイレと、ケージ*を置いたことで、ただでさえ狭い智美の部屋は、もっと狭くなってしまった。ケージのトイレも、本当はブランケットの備品だが、特別に貸してもらえることになった。

ケージに毛布を入れると、ララは大人しく中に入って寝ていたが、夜の間に勝手に智美のベッドに上がって、布団ふとんに潜もぐり込んだようだった。

正直、後悔こうかいはしている。衝動しょうどうに駆かられて引き取ると言ってしまったが、自分ひとりだけ生きていくのもやつとなのに、犬を飼えるような状況じょうきょうではない。

だが、それでもお腹にふわふわしたあたたかいものがくっついているだけで、ひどく幸福な気持ちになるのはな

ぜなのだろう。

ブランケットでの仕事を頑張がんばらなければならぬ。

ここでやっていけないようならば、新しい住居や仕事を見つめるのは難しくなる。ララと一緒にいっしょならば、住む部屋の選択せんたくも少なくなる。家賃の安い単身者用のアパートなどは難しいだろう。ここでなじめるように努力しなければならぬのだ。

智美はそつと手を伸ばしてララを撫なでた。すべらかで柔らかい毛の感触にうっとりとする。体温もちょうど心地いいあたたかさだ。

だが、急に鋭すみじい痛みが指に走った。

手を布団から抜ぬく。布団を持ち上げて中を覗のぞき込むと、ララが低く唸うなっていた。

どうやら噛かまれてしまったようだ。

阿部の家では智美の膝に乗ってきたくせに、ブランケットに連れて帰るとララはまた頑かたくなになってしまった。昨日の晩もケージの中に引ひつ込んだきり出てこなかった。

環境かんきょうが変わったのだから仕方がない。

ドッグフードも食べなかったが、それを麻耶子に言うとは簡単に片づけられた。

「大丈夫。^{*} ハンストして死んだ犬はいないわよ」

そんな大雑把^{おおざっぱ}な、と思わなくもなかったが、それでも犬に常に接している人のことには現実感があり、智美は少し気が楽になったのだ。

だが、それにしても噛まれてしまうのはちよつとショックだ。

痛かったが、噛まれた指を見れば血はでていない。

智美は助けてやったと思っているけれど、ララにとつては大好きな飼い主の家から連れ出されたのも同じなのかもしれない。

昨日もバスケットに入れて連れて帰る時に、ずっとキウウキウウと悲しげな声を出していた。

I 胸の痛みを覚えて阿部を見たが、彼女はこちらを見ようともしなかった。

たぶん、阿部はこの先もずっと苦情を言った隣人を恨む^{うらむ}だけなのだろう。悔恨^{かいこん}に苛まれることもなく、自分を責めることもない。

そう考えると、自分がララを引き取ったのは間違いだったような気もしてくる。

だが、引き取らなくても、恨まれる対象にブランケット

が加わるだけで結局は同じなのかもしれない。

昨日、車に乗り込むと、麻耶子は言った。

「今回だけよ。チビちゃんに飼えるのはせいせい一頭だからね」

てつきり叱^{しか}られるものだと思っていたから驚いた。

「すみませんでした……」

自分で責任を持つと言つても、絶対麻耶子たちに迷惑をかけないとはいいきれない。同じ屋根の下に住んでるのだから。

何より、放置された犬をただで引き取るようなことを何度もやってしまえば、経営に支障がでるほどの問題になりかねない。

それは智美にもよくわかっている。なのに我慢^{がまん}が出来なかった。

布団の中をもう一度覗くと、ララはまた唸った。

だが、あたたかく心地よい布団の中から出ようとしな
J い。自然に笑み^{ほほえみ}が漏れた。

噛まれても、肌^いに伝わる体温を愛おしいと思った。

(近藤史恵『さいごの毛布』による)

【注】

*パピヨン——小型犬の種類。

*血統書——飼育動物の血筋を証明する文書。品種改良に

よるものではないことの証明書。

*保健所——犬や猫等の動物の管理及び殺処分、引き取り

先の募集を行う行政機関。

*言い募る——ますます激しく言う。

*ジュリアン——麻耶子が飼っている猫。

*苛まれる——苦しめられること。

*ケージ——ペットを入れておくかご。

*ハンスト——ハンガーストライキの略。飲まず食わずで

過ごすこと。

問一——線部A「智美の胸の中で暗い感情が渦を巻く」とあるが、「暗い感情が渦を巻く」の説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 大人の女性が相手の悪いところを批判しあい、解決の糸口が見つからないこの状況にうんざりしている。

イ 自分も老犬ホームの一員として働くことになったのに、犬に対しての知識がなく、自分の無力さを悔しく思う。

ウ 人間側のわがままなのに、それを正当な理由として掲げている阿部を、責めるような嫌悪する感情が湧き上がってくる。

エ 今自分が抱えているパピヨンが、元の飼い主からも疎まれて行き場をなくしている現実を寂しく思い、気持ち沈んでいく。

問二 —— 線部 B「心臓を冷たい手でつかまれたようだった」とあるが、これはどういう状態の喩えか、最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア これから共に働く上司が、自分のイメージしていた性格とは異なり、びっくりしている状態。

イ 犬を救う正義感を冷たい言葉で台無しにされてしまい、仕事へのやる気を失いかけている状態。

ウ 人間的な感情を持たない言い方から、自分の温かな思いを否定されたようで、ショックを受けている状態。

エ 麻耶子の冷たい顔が自分に向けられているように感じて、何も考えられなくなり、寒気を感じている状態。

問三 —— 線部 C「捨てられた成犬に価値なんか無い」という発言を智美は冷酷だと感じているが、なぜ冷酷だと思ったのか、智美の動物に対する価値観を説明しなさい。

問四 —— 線部 D「麻耶子には犬たちがお金に見えているのだろうか」とあるが、「お金に見えている」とはどういうことか、説明しなさい。

問五 —— 線部 E「勝手な言いぐさだ」とあるが、なぜ「勝手な言いぐさ」なのか、具体的に説明しなさい。

問六 —— 線部 F「ご自分のためにも」とあるが、犬のためではなく「ご自分のため」と麻耶子が言ったのはなぜか、説明しなさい。

問七 ——線部 G「このパピヨン置いて帰ったら、自分はもうブランケットで働けない気がした」とあるが、なぜ智美はそのように感じたのか。パピヨンを置いて帰ることと、ブランケットで働くこととの関係を明らかにして、百字以内で説明しなさい。

問八 ——線部 H「阿部のあからさまにほっとした笑顔が目に入って、智美は自分に誓った」とあるが、「あからさまに」の意味として正しいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 素直に イ 恥^はずかしそうに ウ ほんの少し エ 目に見えるように

問九 ——線部 I「胸の痛み」とは、何に対する痛みか、説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア キュウキュウと鳴くララの声は阿部にも届いていて、きつと引き取った自分を阿部は恨んでいるだろうと感じたこと。
イ 犬のことを何もわかっていないのに、その場の勢いで引き取ると言ってしまう、麻耶子に無責任だと思われること。
ウ 飼い主だった阿部の人間性は関係なく、大好きな飼い主から引き離されることがつらく悲しいとララが訴えていること。

エ 誰もが幸せな結果を求めているのに、智美が引き取ることは、ブランケットにとってもララにとっても迷惑だということ。

問十 ——線部 J「嘔まれても、肌伝わる体温を愛おしいと思った」とあるが、嘔まれてショックを受けていた智美が「肌伝わる体温を愛おしい」と思えたのはなぜか、説明しなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

哲学の知恵の基本中の基本があります。それは、「問の方のマジック」にひっかからないということです。

「^A問の方のマジック」とは何でしょう？ 例をあげて説明しましょう。

「なんで勉強なんかしなきゃいけないんだろう？」

この本の主題を、ここで次のような「問の方」に変えてみます。

「学校の勉強は、実生活を送るうえで役に立つか、それとも立たないか？」

さて、みなさんはどう思うでしょうか？

これが、わたしの言葉でいう「問の方のマジック」です。

つまり、「あちらとこちら、どちらが正しいか？」という、二者択一問題のことです。

学校の勉強は、実生活で役に立つか、それとも立たないか。そう問われると、わたしたちは思わず、どちらかが正しいんじゃないかと思ってしまうはしらないでしょうか？

でも、この問いはどちらかが絶対に正しくて、どちらかが絶対に間違っているというような問いではありません。

実生活で役に立つものもあれば、あんまり立たないものもある。というより、それは人によって違うから、まさに「X」でできない問題なのです。いわれてみれば（いわれなくても）、あたりまえのことです。

でもわたしたちは、「あちらとこちら、どちらが正しいか？」と問われると、思わず、どちらかが正しいんじゃないかと思ってしまう傾向がある。まさに、「問の方のマジック」にひっかかってしまうのです。

教育をめぐる問題には、こうした「問の方のマジック」に陥らせるような問いが数え切れないくらいあります。そして実際多くの人が、このマジックに見事にひっかかったまま、こっちが正しい、いやこっちこそ正しいと、対立をつづけているのです。

たとえば次のような問題です。

◎生徒はほめて伸ばすべきか、それとも叱って伸ばすべきか？

◎★ゆとりがいいのか、詰め込みがいいのか？

◎★勉強は競争すべきか、むしろ協力し合うべきか？

◎エリート教育をするべきか、みんな平等にやるべきか？

か？

◎授業は子どもの興味・関心を活かしてやるべきか、

それとも興味・関心にかかわりなく教え込むべきか？

◎いじめをした生徒は即刻退学にすべきか、むしろ反

省のキカイ①を与えるべきか？

例をあげればキリがありません。

みなさんはどうでしたか？ 「問い方のマジック」にひっ

かからないように、とさっきいったばかりなのに、思わず、「やっぱりほめるべきでしょ」とか、「いじめは即刻アウトでしょ」とか、思ってしまったりはしませんでしたか？

実はこうした問いは、国の教育会議なんかでもトキオリ②

議論されていたりするものです。そしてわたしたちは、

「有識者」といわれる人たちですら、見事に「問い方のマジック」にひっかかり、あつちが正しい、いやこつちが正しい、と議論しているのをしばしば目にします。

もう一度いいます。これは、「どちらが絶対に正しいか」と問うような問題ではありません。ほめるのがいい時もある、叱るのがいい時もある。いじめをした生徒への対処

も、時と場合によっていろいろあってしかるべきなのです。

もちろん、「1+1=2」と、1+1=3、どちらが正しいか」という問いであれば、それは問うまでもないことです。けれど、それが白黒つけがたい問いであった場合、わたしたちはまさに、それが白黒どちらであるかを、絶対的に決定してしまうわけにはいかないはずなのです。

「1」、 「あちらとこちら、どちらが正しいか」ということをまずやめよう。これが、哲学の知恵の基本中の基本として、まずみなさんにお伝えしておきたいことです。

「問い方のマジック」にわたしたちがどれだけひっかかり、てしまいやすいものなのか、もう少しだけ話をつづけます。

次の問いについて、少し考えてみてください。

豪華客船が嵐で難破した。海に放り出された人た

ちが、流れてきた救命ボートに命からがらしがみつくと、気がついてみると、一〇人乗りの救命ボートに一人が乗っている。このままだとボートは転覆し、全員死んでしまうことになるだろう。ボートを転

覆させないためには、誰か一人を海に突き落とすしかない。さて、この場合、一〇人が助かるためにだれか一人を犠牲にすることは、正しい行為といえるだろうか？

倫理学と呼ばれる分野で、とても有名な問題です。みなさんならどう答えるでしょうか？

これまで、わたしたちがどれだけ「問い方のマジック」にかかってしまいやすいか、ということを書いてきました。だからみなさんもきつと気づいたと思いますが、この問題は、実は「問い方のマジック」の典型なのです。

一〇人が助かるためにだれか一人を犠牲にすることは、正しい行為といえるだろうか？ 「問い方のマジック」の話をした直後でさえ、「それって正しいんだろうか、正しくないんだろうか」と考えてしまった人は多いんじゃないでしょうか。

でもわたしたちはこの問いに、絶対に正しい、あるいは絶対に正しくない、というふうに答えるなんて、実はできないはずなのです。

Y いい方ですが、それははっきりいって「状況

況による」からです。

「2」、もしもボートにもすごく冷酷な男が乗っていて、目にとまったある女性をいきなり海に突き落とすとしたらどうでしょうか？

この場合、男の行為は（それによって残り一〇人が助かることを考えると）、「絶対に正しくない」とはいえないにしても、かなり問題のある行為だと多くの人は感じるでしょう。

「3」一方で、もしもそのボートの中にとっても正義感にあふれた人がいて、一〇人を救うためみずから海に身を投げたとしたらどうでしょう？

この場合、その人の行為は（残された家族のことや、それ以外の選択肢もあったかもしれないことを考えると）、「絶対に正しい」とはいえないにしても、すごく「立派な」行為だと多くの人は感じるでしょう。

そして、今いみじくも「立派」という言葉を使ったように、わたしたちはその人の行為を、「正しいか、正しくないか」なんていうシャクド③だけでは、判断できないし、しれないはずなのです。

だから、右のような問題は、「正しいか、正しくないか」

という問題じゃない。絶対の正解があるような問題でもない。その時々状況に応じて、「どのような選択であれば、ぎりぎり納得できるか」というタイプの問題なのです。

その意味では、ボートに乗り合わせた人たちは、だれも犠牲にしないために何ができるかと考えることだったであろう。近くに別の無人の救命ボートが流れているのが見えて、乗り合わせていた屈強な若者が、そちらへ泳いで渡ろうとすることだっただけであるかもしれません。

いずれにせよ、わたしたちは、とくにこの「救命ボート」問題のように、キョクケン状況におけるある行為が「正しいか、正しくないか？」などとたずねられると、思わず「正解はどっちだろう」と考えてしまう傾向があるわけです。でも、実はまさにこれこそ、「問い方のマジック」にはかならないものなのです。

ちなみに、こうした究極的選択の是非を問う問題は、わたしたちがしばしば出会うものですが、とてもイジメの悪い問いだとわたしは思います。こうした問題は、あるキョクケン状況を設定したうえで、「正しいか、正しくないか？」と問うことで、人の行為には、いついかなる時も絶対に正しい選択があるかのような錯覚に人を陥らせてしまうから

です。そして、状況に応じて柔軟に行動するという発想を、えてしてわたしたちから奪ってしまうのです。

以上見てきたように、「あちらとこちら、どちらが正しいか？」という「問い方のマジック」は、意外にたやすくわたしたちをあざむくものです。だから繰り返しておきたいと思います。「あちらとこちら、どちらが正しいか？」とか、「これは正しいか、正しくないか？」とかいった問いは、まずたいていの場合、「問い方のマジック」なのだ、と。

じゃあわたしたちは、「あちらとこちら、どちらが正しいか？」じゃなくて、いったいどう考えていけばいいのでしょうか。

考え方はシンプルです。あちらもこちらもできるだけ納得できる、第三のアイデアを考えよう。

あつけないほどに単純です。でも、このことを十分に自覚していることが、とてもたいせつなことなのです。

(苦野一徳勉強するのは何のため？)

僕らの「答え」のつくり方による)

【注】

*いみじくも——うまい具合に。

*えてして——無意識のうちに。

問一 ——線部A「問い方のマジック」とは何でしょう？」とありますが、筆者が「問い方のマジック」をわかりやすく言い換えている部分を十字以内で抜き出して答えなさい。

問二 空欄 X にあてはまる最もふさわしいことばを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 一般化 イ 個別化 ウ 抽象化 エ 特殊化

問三 「1」 「3」にあてはまることばを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア しかし イ だから ウ たとえば

問四 ——線部B「この問題は、実は「問い方のマジック」の典型なのです」とありますが、なぜこの問題が「典型」、つまり代表的な例と言えるのか、その理由を「正しい」・「状況」の二語を必ず用いて説明しなさい。

問五 空欄 Y にあてはまる最もふさわしいことばを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 気がおけない イ 二の句がつけない ウ 身もふたもない エ 落ちがあかない

問六 ——線部C「だれも犠牲にしないために何ができるかと考えることだつてあるでしょう」とありますが、筆者はなぜこのような提案をしているのか、その説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「絶対に正しい」行為と「立派な」行為と、どちらがすぐれているかは、簡単には決められないから。

イ 正しいか正しくないか、正解はどちらか、というようにただで判断することを避けるべきだから。

ウ 正しくないとわかっていても選択せざるをえない時があり、その選択をした人が責められてはいけないから。

エ 問題が起きた場合、正しい問題解決には、当事者よりもむしろ傍観者ぼうくわんしゃの方が適していることがありうるから。

問七 ——線部D「あちらもこちらもできるだけ納得できる、第三のアイデアを考えよう」とありますが、本文中の★か★★のどちらか一つを選び、「第三のアイデア」を提案してみましよう。

問八 ——線部E「自覚していることが、とてもたいせつなこと」とありますが、なぜ「自覚していること」が大切だと筆者は言うのか、理由を簡単に説明しなさい。

問九 ……線部①～⑤のカタカナを漢字に直しなさい。

